佳作

海の未来を紡ぐために

山形県東根市立第一中学校
１年　岸前　登弓

小魚１匹見えない。広がるのは無数の小さなプラスチックの破片だけ。かつてこの海には、太陽の光を受けて鉄色に輝くマイワシの群れが泳ぎ、色とりどりの海藻たちがきらめく波に踊り、見ているだけで心が澄んでいくような景色が広がっていたのに、今では魚は姿もなく、汚染だけが残っている――。

これが、海洋マイクロプラスチック汚染を何もせずこのまま放置し続けた世界線の未来。「そんなことさすがに起こらないでしょ」と私も思っていた。今、海には魚がたくさんいるし、水もきれいだから。しかし、こんな未来は意外と遠くないのかもしれない。この夏、そう感じた出来事があった。

私の趣味は水族館巡りだ。以前から夏休みにたくさんの水族館を回っていた。クラゲが有名な加茂水族館。狭いわりに展示の工夫で満足度が高い仙台うみの杜水族館。シャチショーで有名な鴨川シーワールド……。その中で今年行ったのは加茂水族館だ。色鮮やかでキラキラした水槽が次々と目に飛びこんでくる。とても魅力的だった。あの時までは……。

存分に楽しみながらようやく最後の展示屋にたどり着いた私は、入った瞬間思わず息を飲んだ。そこには、実際に近くの海で採取されたマイクロプラスチックが種類ごとに並べられていたのだ。大きさは米粒ほど、よく観察しなければ何だかわからない。色とりどりで一見ビーズのようでかわいらしく思える。しかしその見た目とは裏腹に、マイクロプラスチックには恐ろしい事実が隠されていた。

レジ袋やペットボトル、ストロー、漁具などが波や太陽光の紫外線で砕かれ、分解されることなく何十年、何百年と海を漂う。小魚がそれをプランクトンと間違えて食べてしまい、やがてそれらの魚は食卓に並ぶ。つまり巡り巡って私たちの体にも入ってくるのだ。それはいずれ健康に害を及ぼし、生態系をも壊してしまう。見た目は青く澄んだ海も、見えないところで静かに汚染されている。気づかないうちに進むからこそ、怖い。いろいろ調べているうちに、私は2050 年には海の中のプラスチックの量が魚の量を超えると言われていることを知った。

この現状をうけて、世界各地でプラスチックの回収や使用量を減らす取り組みが行われ、代替素材の開発も進んでいる。しかしマイクロプラスチック問題の認知度は、一般にはそれほど高くないよう感じる。

私はこの夏積極的にごみ拾い活動をした。たくさんの恵みをくれる海や自然に少しでも恩返しをしたい気持ちだった。川原にはペットボトルやカップ麺の容器。海水浴場には、さまざまなプラスチックやシーグラスと呼ばれるガラス片。そして祭りの後の遊歩道には大小さまざまな驚くほど多くのごみ。ごみが最後にたどり着くのは海だ。後でしっぺ返しを食らうのは人間なのに。拾いきれないほどのごみを拾いながら悲しくなった。

この問題の深刻さを私に気づかせてくれたのは水族館だ。常に海が身近にあり、海の異変に敏感だから、水族館は海の環境問題にいち早く目を向けていた。中でも加茂水族館は環境問題に特に力を入れている水族館の一つだそうだ。魚の研究や飼育だけでもいろいろな苦労があるはずなのに、環境問題にまで取り組む姿勢に私は強くあこがれた。

とはいえ飼育員になるのは容易ではない。何か別のやり方で海や海洋生物の力になれないだろうか？　と考え始めた私にヒントをくれたのも、やはり水族館だった。

仙台うみの杜水族館の「深海ナイト水族館」というイベントで行われた講演会で知った平坂寛さんは「生物ライター」という職業の方だ。自分で自然や生き物に関する体験をし、それを本や記事にまとめて発信する仕事だ。「これだ」と思った。海や自然の現状を多くの人に伝え、守るためのきっかけをつくる。これなら私にもできるかもしれない。心からやりたいと思える将来の夢に、初めて出会えた。今こうしてこれを書いていることが、私にとっては将来の夢への第一歩だ。

まだ生まれたばかりの私の夢は、どうすれば実現できるのか、その道筋もよくわからない。でもこうしている間にも私たちは知らず知らずのうちに海を傷つけ、海は静かに悲鳴を上げ続けている。今その悲鳴に耳を傾けなければ、きれいな海で泳ぐことも、食卓においしい魚が並ぶこともなくなるだろう。世界はぎりぎりのバランスで成り立っていて、海を傷つけることは私たち自身を傷つけることにつながる。それはもう始まっているのだ。

海と私たちの未来を守るために、今、私にできることは何だろう。本を書くのは無理でも、動画を作って発信することはできるだろうか。少しでも誰かの意識を変える足がかりになること、それが私のチャレンジだ。